No.（　　57　　）令和３年度　地域と共働した博物館創造活動支援事業成果報告書

<table>
<tr><td>事業名称</td><td colspan="4">「常設展示室は面白い！コミュニケーションツール開発」プロジェクト</td></tr>
<tr><td>実行委員会</td><td colspan="4">えひめ「常設展示室は面白い！」実行委員会</td></tr>
<tr><td rowspan="4">中 核 館</td><td colspan="4">愛媛県美術館</td></tr>
<tr><td>住所</td><td colspan="3">〒790-0007　松山市堀之内　愛媛県美術館内</td></tr>
<tr><td>TEL</td><td>089-932-0010</td><td>FAX</td><td>089-932-0511</td></tr>
<tr><td>ホームページ</td><td colspan="3">http://wwww.ehime-art.jp/</td></tr>
<tr><td>構成団体</td><td colspan="4">愛媛県観光スポーツ文化部文化局まなび推進課、愛媛県総合科学博物館、愛媛県歴史文化博物館</td></tr>
<tr><td>事業開始時点の課題分析</td><td colspan="4">当館ではこれまで県内博物館・学校と協働して、各館のコレクションを活用した対話型鑑賞の普及を進めてきた。また県内視聴覚センター・県立盲学校等と協働し、視覚に頼らない美術の楽しみ方をコレクションを活用しながら探ってきた。現在、国内の美術館・博物館ではコレクションを見直し活用する動きがある。そのため愛媛では県立３館において、コレクションをテーマとし、博物館利用者の気づきや学びを深めるコミュニケーションを軸とした実験的・先進的なツール等の研究・開発を進め、各ミュージアムの魅力向上を図りたいと考えている。</td></tr>
<tr><td>事業目的</td><td colspan="4">愛媛県美術館・総合科学博物館・歴史文化博物館と県庁主管課等と協働で、コロナ終息後を見据え、コレクション活用のさらなる活性化を目的とした博物館利用者とのコミュニケーションツール（ワークショップ・展示手法・キット等）の検討・開発・評価を実施する。</td></tr>
<tr><td>事業概要</td><td colspan="4">令和３年度は県立３館と協働で、常設展示室やコレクションの理解を深めるアウトリーチの場において、利用者と館との対話や、利用者自身の気づきや学びを深めるコミュニケーションツール（ワークショップ・展示手法・館内外で使えるキット等）の検討会議と国内先進館への調査を実施する。３年度の成果については検討過程の議論を含む報告書を作成し、次年度への方向性を定める。</td></tr>
<tr><td>実施項目
・
実施体系</td><td colspan="4">１　コレクションを活用したコミュニケーションツール開発のための環境整備
（１）コレクションを活用したコミュニケーションツール開発のための検討・調査
①常設展示室等でのコミュニケーションツール開発のための検討会議の開催
②国内先進館への調査
③常設展示調査ワークファイルの作成</td></tr>
<tr><td>実施後の成果・効果等</td><td colspan="4">検討会会議は予測できたとは言えコロナに翻弄された。検討を重ねる中で、美術館・博物館利用者に「みる」こと―作品や資料、展示を読むという行為を真の意味で「面白い」と理解してもらうためには、『ツール』も大事ではあるが、開催期間が過ぎてしまえばなくなってしまう『企画展示』ではなく、各館の顔ともいえるコレクションが常時展示される、利用者がいつ訪れても学ぶことのできる『常設展示』の活動そのものについて検討していくことが一番大事なのではという合意に至ったことは良かった。
先進館視察では、コミュニケーションツールや展示プログラム等の調査に加えて、博物館利用者の学びを中心に考えた展示作品の選び方、キャプションの表現のあり方、さらにインクルーシブな展示の在り方について探ることとなり今後の実験的・先進的な「常設展示」づくりへの知見を得ることが出来た。しかし年明けからのコロナ禍によりその後計画していた視察調査を中止せざるを得ない事態となった。そのため次年度も各館の予算内において引き続き先進館調査を継続していきたいと考え常展展示調査用の「ワークファイル」の制作を行った。次年度はこれらをもとに常設展示の調査を重ね、その上で令和５年度の補助事業に再応募した
い。</td></tr>
</table>

【事業実績】

コレクションを活用したコミュニケーションツール開発のための検討・調査を実施した。

（1）　検討会議　オンライン＋対面　　場所：愛媛県美術館会議室

①　第 1 回検討会議：令和 3 年 6 月 28 日　(13 名参加)

ア　事業概要等説明　イ　意見交換等

②　第 2 回検討会議：令和 3 年 10 月 13 日（10 名参加）

ア　事業の方向性と今年度のスケジュールについて　イ　視察先美術館・博物館検討

③　第 3 回検討会議：令和 3 年 12 月 10 日（11 名参加）

ア　他館視察の報告・共有を行った。イ　来年度活動の検討を行った。

（2）　小会議（検討会議のための 3 館を中心としたミーティング）オンライン＋対面

場所：愛媛県美術館会議室

・令和 3 年 7 月 9 日と令和 3 年 7 月 30 日に県外外部専門家を除く県内実行員会メンバー（博物館メンバーを中心に）事業課題の共有と実施事業の検討を行った。(9 名参加)

（3）　国内先進館への調査

・各館への視察のメンバー：主として各館とも外部専門家を含む複数人数での調査を行った。これは、調査結果に複数の視点を取り入れるためである。

・調査方法：外部専門家のアドバイスを受け、先ずは自分たちの目で展示（ワークショップ）をみて、考えた上で、その後、展示担当者の話を聴くという順番を基本にした。これは、先に展示意図等を担当者から聴いてしまうと、その視点でしか展示（ワークショップ）をみることができなくなってしまうことを避けるためである。

①　令和 3 年 11 月 10 日･11 日

沖縄県立博物館･沖縄県立美ら海水族館

・沖縄県立博物館常設展示調査

・沖縄県立美ら海水族館幼児対象教育普及プログラムの開発と評価について調査

沖縄県立美ら海水族館・いるかパズル

②　令和 3 年 11 月 15 日･16 日

国立民族学博物館

・国立民族博物館導入展示の作品選定、キャプション等の調査

・常設展示キャプションの調査

・新ワークシートの表現（言語）調査

・企画展（インクルーシブ展示）の作品選定、キャプション等の調査

国立民族学博物館常設展示室前の導入展示

③　令和 3 年 11 月 22 日･23 日
光島貴之アトリエ･ヴァンジ彫刻庭園美術館･ビュフェ美術館

・光島貴之アトリエでの視覚障がい者対象の展示作品制作過程についての調査
・ヴァンジ彫刻庭園美術館での触れる展示とナビレンズについての調査
・ビュフェ美術館の展示の考え方についての調査

ヴァンジ彫刻庭園美術館の触る展示

④　令和 3 年 11 月 30 日～12 月 2 日
北海道博物館･国立アイヌ民族博物館

・北海道博物館での常設展示の展示方法、ワークショップの調査
・国立アイヌ民族博物館での最新のハンズオン展示、キャプション、パネルの表現、展示の理念についての調査

国立アイヌ博物館でのワークショップ

(4)　常設展示調査用ワークファイル･みる｢発見｣ノートの制作

･先進館調査はこの他にも計画していたが、年明けからのコロナウイルス対策のため県外への出張を中止せざるを得ない事態となったため、現段階では次年度の応募に続く充分な調査ができていない。

このため、実行員会内3館で相談し、今後の常設展示調査のためのワークファイル｢みる『発見』ノート｣を制作することとなった。次年度はこれらをもとに各館の予算で常設展示の調査を重ね、その上で令和５年度の補助事業に再応募し、利用者に「みる」ことの面白さをを繰り返し学べる場としての｢常設展示｣を愛媛県美術館･愛媛県総合科学博物館･愛媛県歴史文化博物館において、試行し事業評価を重ななながら、新たな展示のスタイルを創造していきたい。

常設展示ワークファイル・「みる」発見ノート